

夏に抱かれて

De guerre lasse

夏に抱かれて

フランソワーズ・サガン

DE GUERRE LASSE

by

FRANÇOISE SAGAN

Originally Copyrighted by Editions Gallimard, 1985.

This book is published in Japan by arrangement with les Editions Gallimard,
Paris, through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

なつ だ
夏に抱かれて

昭和63年 8 月20日発行 昭和63年 9 月20日 2 刷

■著者

フランソワーズ・サガン

■訳者

あさ ぶき ゆ き こ
朝吹由紀子

■発行者

佐藤亮一

■発行所

株式会社 新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替東京4-808

電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

■印刷 株式会社光邦 ■製本 大口製本株式会社

定価1400円

© Yukiko Asabuki 1988, Printed in Japan

ISBN 4-10-503013-2 C0097

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

夏に抱かれて

わが息子ドニに捧ぐ

第一章

一九四二年のあの年は、季節までもが急速に変化した。五月になると、牧草は夏のような暑さにしおれた。丈のある草々はぐったりと乾き、地面にこうべを垂れ、少し離れた池の上では、尾をひくような霧が夕暮れの中にたなびいている。ひび割れたピンク色の家は、何か秘密を隠しているように二階の鎧戸を閉ざし、一階の両開きのドアは驚いたように半開きになっている。まるで心配事がかかえている老婦人がまどろんでいるように――。

時計の針はすでに九時をまわっていた。食後のコーヒ―は、階段を降りたところの、涼しさが期待できそうなテラスに用意された。

が、夜はあまりにも明るく、あまりにも暖かく、まるで真夏の白昼のようだった。

「これで五月なんですからね」とシャルル・サンブラがうんざりしたような声で言った。「八月になったら、いったいどうなることやら」

彼は吸っていたたばこを前方に投げ捨てた。

吸殻は、それが宿命であるかのように、すぐ近くに落ちた。彼の目にはこのたばこが自分たちの将来を予告しているように映ったかも知れないが、ロッキング・チェアーに深々と身を沈めていたアリス・ファイヤットは、ちらつと目をやっただけで別に不安は感じなかった。なぜなら、それは力のこもった仕草であつたし、火のついたたばこは、闇の中で、激しく砂利の上に叩きつけられたからだ。それに、逆光に浮かんだ男のシルエットとその素早い動作は、宿命というよりは生命力を物語っていた。やや切れ長の栗色の瞳、肉づきのよい唇、肉感的な鼻をもったシャルル・サンブラ。驚くほど黒い髪と繊細な睫毛に縁どられたその容貌は、どこか女性的で、一九〇〇年代風のやや流行遅れの女たらしの美男子、という感じはあるものの、不安な予感とか、まして運命を予言するとかといった影はない。それにしてはめずらしく反感を抱かせるような感じではないわ、とアリスは思った。戦時中の一九四二年五月だというのに、見るからに人生の快楽を満喫し、健康に溢れているこの男を、無自覚で恥ずべき時代錯誤だと彼女が憤慨しないのは不思議だ。とはいえ、やはりアリスは、彼が祖国の歴史にまったく無関心でいられることに苛立ってはいた。だが、この男と、この家の匂いと、彼の所有する草原やポプラの緑と丘との間には、考えれば腹立たしいことだが、とにかく、あきらかにある種の調和が保たれていた。つまり、フランスの国旗のごとく愛国的でないながら、青りんごのごとく酸っぱく辛辣な対独協力者ペタン元帥の雄弁な演説が納得できる、そんな類いの調和であつた。も

ちろん彼女が一時でもそんなことがあり得ると思ひ込むとしての話だが——。突然、アリスには老元帥の重々しく、甲高い声、次いで、彼方から、狂信的な男、ヒットラーの荒々しい叫び声も聞こえてきたように思えた。彼女は目を瞬き、頭を後ろにのけぞらし、本能的にジェロームのほうを向いた。

ジェローム、彼もまた、暖かい草の匂いに誘われて眠ってしまったようだった。目を閉じ、淡い色の卷毛と額との境がさだかでない彼の顔は、やつれて無防備だったがどこか緊張していた。ジェロームの顔。今日のアリスは彼にすべてを負っていた。この草も、星の鏤められたこの夜空も、そしてこの突然の神経の安らぎも、すべてを負っていた。しかし、この漠然とした、だが曖昧な快感や、穏やかな恥らいをとらなつたこの漠然としたノスタルジーは、強烈に男性的な魅力をもつジェロームの幼な友だちサンブラが抱かせたのだった。二人はサンブラの家に、この日、不意にやつてきた。友だちだからこそ、何のことわりも必要としなかった。アリスはまばたきをし、頭を振ってジェロームの注意をひこうとしたが、彼のほうがずっと前から目を見開いて自分を見ていたことに気がついた。このように、アリスはジェロームに気がつかないことがよくあつた。彼女はそれが自分の自己中心的な性格のせいか、あるいは彼の影の薄さのせいだと思つていた。三人の背後で一羽の鳥が奇妙な鳴き声を上げ、シャルルは笑い出した。「この鳥は馬車引きのように鳴くね」と彼は快活に笑つた。「いつも思うんだけど、下品なことばかり言っているようだ。そう聞こえない？ このさえずりは、ロマンチックでもなければ

美しくもないし。まるで怒り狂っている感じだね。だからつい笑ってしまうんだ」

「そうですね」とアリスは儀礼的に答えたが、確かにそんな感じもすると思つて、しまいには面白がる。「もしかすると夜行性の鳥でないのに、どこか器官がこわれてしまつて苛立つているんじゃないかしら」

いったい、ジェロームとアリスはこんなところで何をしているのだろうか。なぜ二人はドーフィンネ地方で製靴業を営んでいるこの哀れな男と、一羽の鳥の下品な鳴き声について語らなければならぬのだろうか。

「粗末な食事しか出せなかったけど」と、シャルルは続けたが、その声には氣後れなどひとかけらもなく、むしろシニカルでさえあつた。

この男はきつと、氣まづさとか後悔とかいつたものには無縁なんだわ、とアリスは思つた。彼女は見栄とか心の平安というものをこの上なく嫌い、それを都会のネズミや野ネズミが、また、から威張り屋やお調子者が銜^ておうと、そんなことには無関心だった。しかしジェロームと二人でこの家に着いたときのシャルルの驚きと喜びよう、二人が期待もしていなかったオムレツを無器用に彼が焼いていたときの姿を思い浮べて、彼女は思わずほえむのだった。彼のけたたましく響く笑い声を聞いた一時間前は——もう一時間も経っていたのだ——そして少なくともその晩は、彼女は批判的になることができなかった。結局のところ、この男はただ単に心がやさしいというだけなのだろう。それは、今日においては美德であり、彼の容貌と同じくら

い類いまれなものだったが、少なくともこの美点こそジェロームと彼女の計画に役立つことになるであろう。そう彼女は確信を抱いた。やさしさが、シャルルのすべてから、顔からも態度からも滲み出ていたからだ。彼は美男子でもあるが、ともかく善良な人間だ。ジェロームから聞いていたとおりだった。だがアリスはあの時のジェロームの口ぶりには軽蔑したような調子がかすかにあつたことを思い出した。そして急にそれが不当的を射ていないように思われてきた。でも結局、どんなに女好きで、少々間抜けで、物質主義で頑固であつても、シャルル・サンブラは、この二人の泊り客のせいで、彼の甘美なるフランスでまどろんだまま壁に立たされ銃殺される日がくるかもしれないのだし、そうでなくとも残忍な乱暴者どもに拷問される恐れがあるのだ。しかも、その理由を知らされないままに。しかし、このような結末が彼自身にとつてもアリスたちと同じ意味を持つていかどうかを確めないうちは、その理由を話すわけにはいかなかった。彼女は急に、自分が恥ずべき行動をしていて、太古からの聖なるとも呼ぶべき彼のもてなしを汚しているような気がしてならなかった。自分はまるで羊小屋に入ったオオカミのようだと一瞬思った彼女は、羊のシャルル・サンブラの、黒く、濡れたような瞳が、自分のほうをじつとみつめていることに気づいた。そのまなざしは彼女の、オオカミという恐ろしい役柄をどこかへ霧散させてしまうほどのものだった。

「そんなことないよ、素晴らしくおいしいオムレツだったよ」とジェロームは言う。「おい、今時、パリだったら、これほどおいしいオムレツのためなら喧嘩だってするぜ」

「それはちよつとオーバーなんじゃないか」、シャルルは冗談ぽく言つて、「配給はそのうち順調にいくようになるさ」と続けた。「ドイツ人は拔群に組織立っているからね」

「ふん、そう、そう思ふかい?……」ジェロームのその声は生返事のようなうわの空で、皮肉もちよつぱり混つていた。

探りを入れ始めたな、とアリスは氣落ちした。そう、ジェロームはもう始めているのだ。もう一晩だけ待てなかつたのだろうか、せめてもう一晩だけ、私たちの運動と無関係に過ごせないのだろうか。彼女の臉に焼きついてゐる辛苦に満ちた暗い場面が、幾百となく連なつて思ひ出された。安ホテルのドア、薄暗い路地、駅のホーム、仮住まいのアパルトマン、中身を整理したばかりのスーツ・ケース。それらは悲しく、汚なく、どこにでも見られるベシミックな光景であり、そして常にささくれ立つた映像であると同時に、^{レジスタンス}対独抵抗運動の姿でもあつた。それらのシーンは、この円形の草原や、まるく拡がつた空や、遠くにそびえるポブラの曲線の中で思ひ出すにはなおさらのこと、ある種の恐ろしさを増していた。彼女は目に涙が溢れてくるのを感じた。ここに来なければよかつた。ここに立ち寄つてくつろいだりせず、ただただ街角から街角へ、門から門へと、せわしく、ジグザグに、あるいは転びながらも走り続けていればよかつた。こんなに平和でこんなにまるい大地に寝そべりになど来るのではなかつた、これまたまるい首をしたこの男の前に。そう、シャルルの首はまるく長く、ある女流作家が洒落た小説の中で描く肉感的な白樺の木のようなだ。

日焼けしたまっすぐな首と、それを覆う長すぎる黒い髪。女に捨てられた男の髪……彼女はふとそう思った。

「シャルル、あなたは結婚していらつしやらないの？」彼女はほとんど心配そうに聞いた。というより、そう尋ねている自分に気づき、暗がりの中で顔をあからめ、自分のぶしつけな質問をひどく後悔した。前の日にジェロームにその種の質問は控えるようにそれとなく言われていたのに。アリスはすぐに、独身生活をこんなにも平和に楽しみ、こんなにも自信たっぷりな地方の伊達男に対して、自分がばかげた、見当違いの同情を抱いたことをひどく後悔した。ドイツ人はとても組織立っており、フランスには食糧が充分にあると思っているこの小実業家、そして彼の肉体は、アリスにとってひどく魅惑的であった。

この男にとつては、このうえもなく心地よい世界で、万事がうまくいっている、というところなのだ。

「女房は出ていってしまいましたよ」とシャルルはアリスを見ずに答えた。「彼女は今リヨンに住んでいます。ぼくは自分の身のまわりのことはあんまりできないが、ルイがいるし、奥さんのエリザが毎日食事を作ってくれるんです——日曜日を除いてはね……そんなわけです。その食事はひどくてね。お出でになることを前もって知らせて下さればよかったのに……」

「あら」とアリスは赤くなつた自分の顔を隠すために肘掛け椅子に埋れてつぶやいた。「オムレツのことを言つたのではなくってよ。つまりその、私は……」

「ええ、もちろん、わかっています」とシャルルが氣まずそうに、しかしなだめるように笑ったので、アリスはますます当惑してしまった。

「ごめんなさいね」と彼女は立ち上がって言った。「半分眠っていたとか、夢うつで話していたので、自分でも何だかよくわからなくて。お食事は、ほんとうにともおいしかったわ。でももう私、そろそろやすませて頂くわ。延々と汽車に乗っていたものだから、とても疲れてしまつて……。かれこれ二十四時間の旅でしたのよ。ねえ、ジェローム」

アリスに挨拶するため男性二人はさつと立ち上がったが、ジェロームは、毎度のことながら椅子につまづいてしまい、シャルルのほうがいち早くアリスのそばで、緊張したおももちで体を硬ばらせて立つていた。アリスは、二人の男性がまるでアメリカの喜劇映画のように自分をつめてゐるのに氣づき、急に楽しくなり、笑いをこらえて急ぎ足で家の中に向かった。

「お部屋に案内しましょう」とシャルルは言った。「いや、ジェロームに案内してもらおう。彼はこの家を自分の家のようによく知つてゐるからね。うれしいことに」と言いながら彼は、片足をひきずりながら追いついてきたジェロームの腕に手をまわす。「ぼくなんかよりもジェロームのほうが、あなたの好みを知つてゐるわけですから。残念なことに」と、彼は次の仕草に移る前に思いがけなく時代がかった優美さでそう付け加えた。シャルルはアリスと握手せず、ただ一歩うしろにさがり、アリスに小さく頭を下げた。それはほとんど素気ないお辞儀だったにもかかわらず、急にアリスには、長く熱い手の甲の接吻よりもはるかにエロチックに感じら

れた。彼女は自分自身を落ち着かせるために、わざとにつこりほほえんでみせた。目と目があつた。彼の瞳は、とても黒く、非常に男性的で、子供っぽく、つまりは動物的だった。曖昧さや傲慢さといったものをひとかけらもちあわせていない瞳だった。アリスはこのようなまなざしを、世間でいういわゆる女たらしにしか見たことがなかった。ごく若い頃に浜辺などで見かけた男たちは、その態度、そのまなざし、すべてが、はつきりと、端的に女だけを求めている。彼らはいつも男同士では退屈し、男に嫌悪を抱いていることを隠しきれないでいた。思い出してみれば、彼女は今までにもこういう手合の男に出会ったことがあった。非常に落ち着いていて、最高の美男子で、礼儀正しくかつ控え目、そして多くの場合は目立たないぐらいの存在にもかかわらず、こういう男のために自殺をしたり、脱け殻同然で、ただ生き永らえているだけといった女がいる。が、そういった男たちは別に責められるような事は何もしていないのである。女のほうもまた、彼らを決して恨んではない。またこういう男たちは、他の男たちとつき合わず、スポーツにもトランプにも他の悪癖にも興味を示さない。彼らにとって、この地球上の唯一の住人は当然ながら女たちだけなのだ。彼らが愛し、別れる女たち、時には女を糧として生きることとはあつても平然と、気まずさや罪悪感を抱かずにいる。大女流作家のコレットが見事に描いている有閑階級のこういった人種は、とうに消滅したはずで、仮にその子孫が存在していたところで、ここロマン町の近郊で靴の製造などしているはずもなかった。

「いや、いや」とジェローム。「いや、ここはきみの家なんだから、きみがアリスを案内して

やつてくれよ。麦色の部屋なんかいいんじゃないかな。じゃ、アリス、またあとで」と、声をひそめるようにして言った。「おやすみを言いに行くよ。時間があんまり遅くなくて、お邪魔でなければね」

彼女は答えずにほえんだ。そしてシャルルに、部屋に案内してもらった。ぼうつとしていたのは疲労のせいもあったが、喜びに浸っていたからでもあった。家中に漂っていたのは、ドライ・フルーツとワックスの匂い。もう嗅ぐこともないだろうと思っていたなつかしい匂いだった。

シャルルは無言のまま仰々しく、ゆつくりと歩いていた。手を後ろに組み、まるでガイドか、不動産屋の案内人のようだった。シャルルのあとに続いて、彼女は客間サロらしい部屋に入っていた。そこは大広間で、床には、横腹に穴のあいたガラス玉の目のヒョウが何枚も敷かれており、壁には朱色の肖像画が曲がつて掛かっていた。玄関ホールを通って階段に行くと、猟犬が数匹、場所をふさぐように寝ていたが、犬を起すこともなく階段をのぼることができた。やつと行き着いたところは、大きな四角い寝室だった。しおれたような淡いピンク色の大きな花模様の壁紙が、カギ針編みのカバーをかけた、産褥用か新婚用を思わせる大きなダブルベッドを取り巻いていた。しかし、まず彼女の目をひき、彼女が真つ先に近づいていったものは、真冬の時のように燃え立っている暖炉の紫色の火だった。アリスは、夏には薪の火を好み、冬ならガラス戸を開け放すのが好きで、また秋なら湖で雨の中を泳ぐのが何よりも好きだった。彼

女は、暖炉の上の鏡に映っていたシャルルをちらつと、不思議な思いにかられて窺ってみた。彼が夕食後、席をはずしたのはほんの数分間、まさに、この暖炉に火を焚きつけられる時間だったのだ。しかもこの部屋は、ちょうどジェロームがつい先ほど提案した寝室だった。シャルルは、彼女をみつめていた。アリスには、ドアのところに立っているシャルルが見えた。鏡が映した彼が。まっすぐ立っている彼の姿。両手は相変らず後ろで組まれている。そして、彼のまなざし。彼の目はゆっくりと部屋の中を見廻した。窓、暖炉、ベッド、磨きたてられた床。所有者特有の、目利きの、満足げなまなざし。そのまなざしは彼女を眺めたときも変わりはしなかったが、鏡の中で二人の視線が出会った瞬間、彼は瞬きをした。アリスはとっさに彼のほうに向き直った。彼を窺っていた自分が見られてしまったことに、気まずさと苛立ちを覚えたからだ。それに、ジェロームが面白がつて予想したことや予言が、まさに現実のものとなり、彼の言った通りに事が運ばれていくことに、反発と憤慨を覚えたからだ。今度こそは役に立てる、役に立ちたいと彼女が願っていた矢先に、自分の行動や役割が、取るに足らないものになってしまったこと、というよりは自分が何ら責任のないものに支配されていることに彼女は苛立つのだった。とうに忘れていた昔の怒り、女はものだ、という考えに対する昔の反発が蘇った。独占欲の強い、このシャルルというおめでたいプチ・ブルは、自分の所有する家具や家、工場、愛人たちに満足しており、思い上がりから、すでに得たそれらの所有物の中に彼女をあらかじめ含めようとするその欲望とまなざしに対して、彼女は急に激しい怒りがこみあ

げてくるのを感じた。彼がもう少し近くにいたならば、顔をひっぱたいていたところだろう。だが、まるでそんな反応を予期していたかのように、不思議とシャルル・サンブラは一言も言わずに、大股で部屋を横切り、窓を開けて鎧戸を押し開き、外をのぞきこみ、振り向きもせず驚きの声をあげた。「やあ……うっかりしていたなあ。これを見てもらわなくては。今晚は満月だ。きつと素晴らしいですよ。是非見ておいて下さいね、願をかけて」そしてドアのところに戻るやいなや、「いい空気も吸っておかなくては」と彼は結んだ。あたかも皆で夜のひとときを過ごしたのが風通しの悪い地下室のような場所で、テラスではなかったような言い方だった。

彼が出ていくと、アリスはすぐに眠ってしまった。あのまなざしも、この寝室に案内してもらった時のことも、あの鏡のことも、すべてを忘れて。夜中にかすかに目を覚まして思い出したことといえば、背が高く、大きな手をしたシャルルが、大胆な動作でもって鎧戸を開け放したこと、そして黒い葉をつけた木々がくつきり浮き出た、震えるような濃紺の空が見えたことだけだった。あの男の手と声と笑い声によって一瞬にして世界が一転してしまい、アリス自身も鎧戸と共に、銀河の彼方へ、夜の静けさの中へ、そして眠りと安らぎの中へと落ちていった。彼女が逃亡生活を始めて、ジェロームと隠れるようになってから一年の月日が経っていた。一年前から恐怖の中で生きていながら、彼女は自分の覚える恐怖を嫌悪していた。ところが、田舎のこの部屋の、きしむ床ゆかに立って、外の闇の中で二匹のけむくじやらの犬が砂利をきしませ